



水の価値を知る～inオーストラリア～



水ing株式会社 永東 功嗣
(令和7年度抄録委員会委員)

1. 水道水が飲める国

水道水が飲める国の情報は毎年更新されており、令和6年の国土交通省の資料において、そのまま飲める国は日本を含めてわずか9か国、そのまま飲めるが注意が必要とされている国は33か国となっています。今回は後者の国の中から、オーストラリアでの水にまつわるエピソードを、10年前に筆者が住んでいた頃の経験からご紹介します。

2. 水と暮らす

メルボルンから車で数時間、人口1,000人に満たない郊外の町で、筆者はファームステイ（農作業を手伝う代わりに宿泊場所と食事を提供してもらえる制度）を利用して暮らしていました。公営水道サービスはあるものの、隣家まで数キロ、車が生活必需品となっているその地域では、公道からの距離の関係で公設水道管から分岐させた私設水道管が使用されているケースもあります。また、度重なる干ばつにより水量が十分に確保できないことも多く、新たな貯水池や浄水場の整備が現在も課題となっています。

こうした状況下、多くの家が大きな貯水槽を備えており、滞在先の農家も例外ではありませんでした。その農家ではさらに、ホストファザーの設計で屋根の形状を工夫して雨水を効率よく集める仕組みが整えられていました。集めた水は非飲用水としてトイレ・洗濯・散水・灌水などに優先的に使用し、日々節水に努めています。また、地域では「シャワーは3分まで!」というローカルルールもありました。そのためシャワー前にウェットティッシュで軽く全身を拭き、シャンプーは少ない水でさっと泡立て、洗い流す際も短時間で静かに音を立てないように…と工夫しながら、水の貴重さを実感したのです。



↑ スコールのような雨でも
効率よく集水

3. 命の水に出会う



日本からの直行便が昨年再開されたパースから約550kmの位置にある国立公園…その入口には「暑さは（人を）殺す」という物騒な看板…オーストラリア中部・西部に広がる乾燥帯は、雄大な景観を誇る一方、人間にとっては非常に厳しい自然環境です（虻にとっては天国のようなのですが）。

そんな国立公園を、友人2人と共に散策しました。夏真っ盛りの2月、気温42℃、湿度0%。我々のほかには誰一人いませんでした。看板の警告に従って1人3Lの水を用意し、5時間の散策コースに挑んだところ、途中でふらりと眩暈が。筆者は自分が汗っかきであることをすっかり忘れていました…。そのとき、友人が「実は予備があるんだ」とリュックから差し出してくれた水は、人生で一番美味しい“命の水”となったのです。

